



周一忌来る学問の自由とは
草むしり残る虫へと近づけり
逢へなくて葱の切り口ひそと伸ぶ
時は愛仕込むアップルパイの生地
秋のつばくら悲しみはゆつくりと
躓かぬ人の危ふさ木の实独楽
葭蔵に満ちし刈葭冬隣
銀河にも逸る漣ありにけり
み仏のかたち定まり法師蟬
故郷をとどむる卵場らんば鳥渡る
戦争がありて虫屋になれず老ゆ
残り柿貧しき頃は空を見し

*

笛吹きの笛に合はせて露踊る
熊出没とくと石鏃見てをれば
古釘のごと蜻蛉のつるみをり

佐藤映二
堤保徳
岩井かりん
依田ひろ
折井眞琴
竹岡みち子
増田信雄
古屋洸
吉池史江
木幡テイ
小松まさ子
沖野外輝夫
田村道子
清水逍径
水野星闇

寝起き良き八幡平の秋つばめ
うそ寒や閻魔の声は合成音
行く秋の無音集めて弓絞る
秋日照る図太く生きてリヤカー押し
親子立つグラントゼロや秋夕焼
アルフォンスデーケンの逝く花野かな
ステップマザーを自慢の友よ菊大輪
満月やくらげの足もほどけるか
枇杷を手にひよいと遥かを想い入る
種のなき葡萄ばかりを怖れをり

*

古希からの今が青春檸檬の黄
梟の身を寄せ合ふや三兄弟
小鳥来る日のあかるさや終の窓
秋の初風楡の小路のブックカフェ
認知症になりたき時よ秋の屋

徳丸昭広
佐原よし子
桑原淑子
添田朋子
田辺喜見夫

山田一政
山本碩一
高橋節子
柳原清泉
青木隆
日高礼子
田添博美
西岡嶺子
大浦フサ子
河合照子

岳の源泉 十二月

496

——同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

はじめに。新型コロナウイルスの蔓延が収束する気配がない。不安に包まれ、生活のけじめがつけられない。たちまち十二月になってしまった。合衆国の次期大統領選挙決着、国内の学術会議会員六名の不承認問題など、けじめを付けないで曖昧なまま持ち越される。人の世がもやもやしている時こそ、自然にじかに向かって欲しい。心ある人には山川草木が新鮮に飛び込んでくる。

学問の自由とは——どこまで時事が詠えるか

周一 忌 来る 学問の自由とは 佐藤 映二

加藤周一は広く学問を世に広めた人。詩人的な直観を論理的に分かりやすく説明できた知識人。一句の着眼は学問の自由に関し加藤が生きていたら聞いてみたいというのであろう。観念的な句であるが、着眼はわかりやすい。突き詰めると厳密に説明しなくてはいけないので、ここでは取り上げない。学問とは本来なにを研究してもいいはず。ところが思想問題や国の存続に関する軍事問題になると、時の権力との関わりが生まれる。そこが一番の議論になる。周一忌は十二月五日。平成二十（二〇〇八）年逝去。八十九歳。医師で評論

家。

草むしり残る虫へと近づけり 堤 保徳

晩秋には草が枯れ、僅かの叢に虫が集まる。そこを、草をむしりながら虫を追いかけていった人為を表現した優しさが優れている。小鳥に説教をするアッシジの聖人が好きとか。

逢へなくて葱の切り口ひそと伸ぶ 岩井かりん

巧みな句だ。嗅覚を用い体感を漂わせる。大人の句。意外なことをいうならば、三島由紀夫のような子どもっぽい人には到底詠めない句と思う。

時は愛仕込むアップルパイの生地 依田 ひろ

西脇順三郎の詩片を見ることがし。あるいはロバート・ブラウニングの詩「時は春、日は朝」の調子か。世界へひらいた響きが明るい。神様が食べるパイのようだ。

秋のつばくら悲しみはゆつくりと 折井 眞琴

演歌調が身に沁みる。出だしが秀逸。最愛の人を亡くした虚ろさを流離の思いに重ねた伝統的な詠い方が軽々。巧い。

な句と思う。究極として墓場が故郷とは、かなしみの極みである。

戦争がありて虫屋になれず老ゆ 小松まさ子

虫売りになって好きなことをしたいとの願いは果せず、召集令状のために戦地に狩り出されたという。人生さまざま。反戦の句。

残り柿貧しき頃は空を見し 沖野外輝夫

深いことを軽く表現し、胸を打つ。梢の柿は鳥に分かつ。貧しさを支えるのは豊かな心。空はみんな知っている。作者は諏訪湖浄化を進めた環境を守る学者グループのリーダー。

他に同人集から推薦候補作をあげる。

谷 蟻の生れ変りと豪語せる 国見 敏子
縄を絢ふ藁を一晚露に置く 久根美和子
道化師の手持ぶさたや秋の街 須田奈津子
葡萄一顆含みて世界新たり 秋山 格雄
悩み事探すのが癖 柿谷 有史

石鏃を見て熊出沒への転じの巧み

熊出沒とくと石鏃見てをれば 清水 道徑

山中の博物館を想像したい。縄文遺跡の石鏃の展示物を見

利根川の葭蔵か。関東平野のいにしえが見えるようで、代々の冬を迎える暮しが手に取るように描かれている。

銀河にも逸る漣ありにけり 古屋 洸

秋の銀河系を見上げ、流星を捉えた気持の昂ぶりを「漣」と見たものか。あるいは七夕の句とも読める。

み仏のかたち定まり法師蟬 吉池 史江

見慣れた仏から初めて有難みを感じたもの。筑北あたりの仏様に寄せる素朴な実感が、この中七になった。

故郷をとどむる卵場鳥渡る 木幡 テイ

「卵場」とは墓場とか。みちのく相馬辺での呼称か。重厚

今月の秀句

躑かぬ人の危ふさ木の実独楽 竹岡みち子

穿った句であるが、先を見た真理を探り当てていよう。なかなかここまで先を詠むことはできない。木の実独楽は「危ふさ」の実態の比喩。さて「躑かぬ人」とはいかなるご仁か。

に、熊もどれどれと出てきたか。さすがに熊もお利口になったもの。

古釘のごと蜻蛉のつるみをり 水野 星闇

比喩が蜻蛉の実体をよく想像させる。素直な一物の句体。着実に階段を上り出した作者。時に冒険作が見たい。

寝起き良き八幡平の秋つばめ 山田 一政

清爽な秋の朝を思い浮かべる。間もなくつばめは南へ移る。八幡平の束の間のよき時間。みちのく人は束の間を楽しむ術を知っている。

うそ寒や閻魔の声は合成音 山本 碩一

今月の秀句

笛吹きふえの笛ふえに合あはせて露踊つゆおどる 田村 道子

ハーメルンの笛吹きは町中の鼠を寄せつけた。ここに登場したのは、露を踊らせる名人上手。淡く儚い露物語を想像する。考えつきそうな着想であるが、このような物語は聞いたことがない。作者はスケールの大きな句から、次第に実体のある句に焦点をしばりつつある。楽しみだ。

古くて新しい作。目のつけどころが面白い。大寺では閻魔大王の声を聞かせる。それが合成音とは。寺内の秘め事をばらしてしまったような。それはうそ寒に違いない。

行く秋の無音集めて弓絞る 高橋 節子

弓を射る緊張感を「無音集めて」とは見事な表現だ。季節に哀歓があるう。間もなく冬が来る。

秋日照る図太く生きてリヤカー押し 柳原 清泉

生活力がある。「リヤカー押し」が拔群。私は俳句初学の頃、「リヤカーを墓石に掛け馬鈴薯掘る」と作った。あれは戦後、昭和二十八（一九五三）年だった。

親子立つグランドゼロや秋夕焼 青木 隆

グランドゼロは広島などの爆心地やアメリカ9・11の跡のこと。この言葉の迫力満点。秋夕焼の軽みが救いだ。

アルフォンスデーケンの逝く花野かな 日高 礼子

ドイツ生まれのデーケンさんは、日本へ死生学（生と死を考える学問）を広めたパイオニア。九月六日に召された。八十八歳。花野は温厚なイエズス会司祭の生涯を、さらに永遠の地を暗示している。

ステップマザーを自慢の友よ菊大輪 田添 博美

青雲集

古希からの今が青春檸檬の黄 徳丸 昭広

「檸檬の黄」が新鮮。上の句は私にも八十歳は青春云々がある。この意気が俳人にはぜひ欲しい。句は気合である。

梟の身を寄せ合ふや三兄弟 佐原よし子

梟の三兄弟は仲よし。可愛い置物ではなく、生きている梟。愛の句が温かい。

小鳥来る日のあかるさや終の窓 桑原 淑子

「終の窓」にどきっとした。病窓か。この明るさは悟りか。

秋の初風楡の小路のブックカフェ 添田 朋子

お洒落な句。初めての秋風もいい。心洗われる。

他に岳集・青雲集から推薦候補作をあげる。

吾が余生曖昧だらけ鰯雲 土屋 忠史
雲はまだ力をあまし今朝の秋 辰野 利彦
敬老日踰躍けることもご愛敬 渡辺 正剛
コロナウイルス松茸御飯効きさうな 青柳 義之
新涼や色替えて書くスケジュール 遠藤 洋子

今月の秀句

認知症になりたき時よ秋の昼 田辺喜見夫

いい秋の昼なのであろう。ぼーっとしたい。大胆な表現に心中が見え、驚いた。これは凄い句でもある。

推敲・添削 ⑦ ●●●●●●●●●● 宮坂 静生

○当然連想できる範囲のことは言わないで、他のことを
原句 秋の暮飛驒の連山夕日かな

「秋の暮」ならば「夕日」は連想されるので、言わない方がいい。そこで飛驒の秋の暮のイメージを浮かべ、いくぶん新鮮な光景に変えてみたい。例えば、

○秋の暮飛驒の連山燃え上がり○秋の暮飛驒の連山燃え残り
○秋の暮飛驒の連山倒れくる ○秋の暮飛驒の連山羽沈め
いくらでも出てくる。夕日を留めている状態、時間がもう少し進むと、黒ずんで山が落ちついてくる状態。自分は何を表現したいか。燃え上がる華やかさか、連山が沈み寝に着く静かさか。ここで作者の好みや詩想が出る。

○このように推敲し、添削する

原句 秋晴や子らの目浴びる千歯扱き 赤澤 久喜
添削 秋晴や子らの見つめる千歯扱き

着眼はいい。子らが珍しがって真剣に見ている感じを出したい。「見つめる」の方が子らの真剣な目を感じられる。

原句 カレンダー残る写真に鳥来る 丸山 盛茶
添削 カレンダー残る写真に小鳥来る

添削 カレンダー残る写真に渡り鳥

「鳥来る」では季語がない。「小鳥来る」は秋の季語。安定感があるのは「渡り鳥」であろう。

原句 秋茄子の光の尻の粘つき 穂苅 真泉

添削 秋茄子の尻の光の粘つき

「光」と「尻」を交換する。明快に焦点を絞る。

原句 秋雲やアッシジの光散歩道 山本 正子

添削 アッシジの光れる道や秋の雲

イタリアのウンブリア平野の町アッシジ。聖フランチェスコで名高い、まさに光かがやく地だが、「アッシジの光」は表現に工夫がほしい。句がぼきんぼきん切れる感じや、中七の字余りはどうか。「散歩道」は緊迫感を削ぐ。ここは削るのがよい。

原句 黄泉へ師の笛とよもす秋惜しむ 寺地 和子

「秋惜しむ」がどうか。「黄泉」があれば、師が亡くなったことはわかるので、「秋惜しむ」は思いがダブる。ここは客観的な「秋の果」くらいがいい。句が毅然としまる。

添削 黄泉へ師の笛のとよもす秋の果

原句 いたはられる夫幼な夏逝かむ 森 玲子

「夏逝かむ」と推量するのはどうか。夏のような季節は自然に過ぎてゆくもの。ここは淡々と客観視するのがいい。

添削 いたはられる夫幼な夏の逝く

原句 森は秋旅のトロッコ爺婆等 伊藤 美恵

三段切れか。意味は連想できるが、余分なことは「旅」は省略できるであろう。「旅のトロッコ」は言い方が強引。「トロッコ電車」と言えばわかりやすい。トロッコ電車が爺婆でいっぱいと言う。

添削 森は秋トロッコ電車爺婆等